

## 『東都歳事記』を巡る謎

## ―一通の書状から読む上方と江戸の情報ネットワーク―

《キーワード》横山華山 斎藤月岑 年中行事 祭礼 俳諧

横山 昭

## はじめに

横山華山という画家をご存じだろうか。彼は十九世紀初頭の江戸時代、いわゆる文化文政期の京都画壇で活躍した画家であるが、最近では知る人ぞ知るといって存在となっていた<sup>①</sup>。私はかねてより私にとっては先祖にあたるこの画家に興味を抱き、その業績を調査していた。一九八〇年の日本経済新聞の文化欄にそれまでの調査の内容を投稿して以来約三〇年、今ではようやくその知名度もかなり上がってきたようだ。調査の過程ではポストン美術館に彼の作品が十二点も所蔵されている等海外にかなりの作品が流出していることも判明している。二〇〇〇年には山形美術館で横山華山展も開催され、「紅花屏風」「唐子遊図屏風」「祇園祭礼図巻」「西王母図」等、国内にある代表作も展示され、それも契機となって最近では国内各地の博物館・美術館にも所蔵されるようになってきている。

二〇〇八年の暮、たまたま送られてきた京都の古書組合の売立目

録を眺めていたところ偶然にもそこに華山の書状が掲出されているのが目に止まった。その書状の宛名を見ると斎藤月岑とある、私は目を疑った。斎藤月岑（一八〇四―一八七八）といえば誰もが知っている江戸の著名人、彼の著した「江戸名所図絵」（一八三四―一八三六）や「東都歳事記」（一八三八）<sup>②</sup>等は江戸後期の江戸の姿を活写して名著の誉れ高く、出版当時から平成の現在に至るまで再版・復刻を繰り返し、研究者のみならず江戸時代を懐かしむ一般の好事家にも高く評価されている。

その月岑と京都の一町絵師にいかなる係わりがあるのか、私は早速購入を申し込み、幸いにして落札入手することが出来た。書状に見る華山の書体は極めて癖のある字で解読に苦しんだが専門家の協力を得てようやくその全貌を把握することが出来た。そこに書かれた内容を見ると実に興味深い事実が含まれていることに驚いた。本稿はその概要の報告である。

一・書状の紹介

本紙原本（図1）の法量は縦一六・〇糎横六三・二糎の掛幅仕立てで茶掛にでも使用されていたのかも知れない。原本は図で見るとく難解なので釈文を次ぎに掲げる（なお以下の本稿における引用文については文字、假名使い、段落等は原文のままとする）。

愈御安静奉欣奉候陳者

先日者御芳問被成下候処

御草々之至奉漸忞候

殊に其節者好物之

一樽御恵投被成下是志

奉謝候歳時記御草稿

拝見毎々感嘆仕候少々

管見差加へ完璧仕候掃

塵會之繪上へ國朝詩別

載の詩御加入御座候ハ、如何与

存申候て認はり付差上申候

其餘大道餅搗の細注も後二

至らハ御著述の御趣意ニ

相成可申かと奉存候右ニ添

詩ハ如何とも餅搗のわけハ

加へ申度事ハ懸想文賣の

増山井二而相わかり申類にて

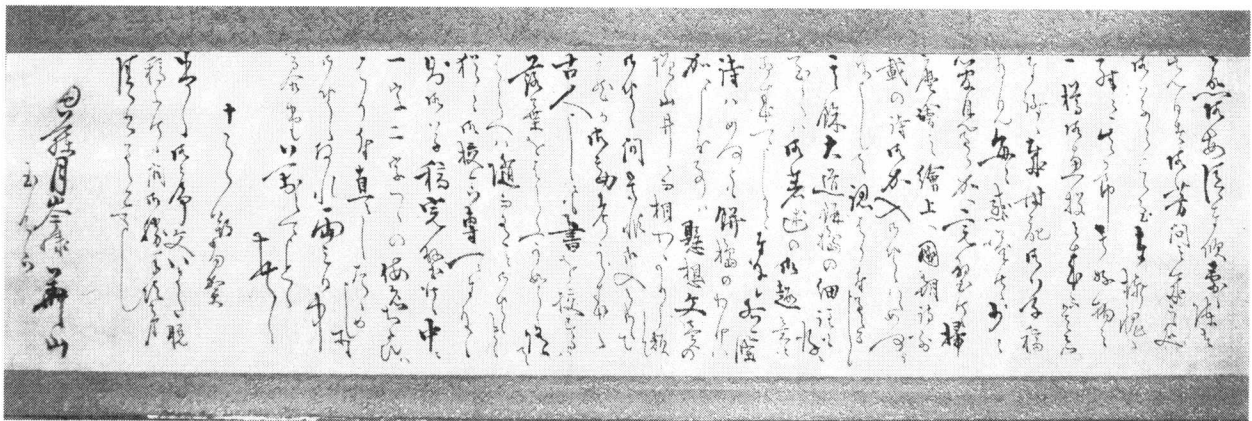


図1 横山華山 斎藤月岑宛書状 個人蔵

御座候間是非御入被成候て

可然か御勘考可被成候

古人申ニも書を校するハ

落葉をはらふか如し跡て

はらへハ随而有と御座候ま、

猶々御校正專一二奉存候

則御尊稿完璧仕候中ニ

一字二字つゝの假名ちかひハ

はり付直ニしたゝめ申候所も

御座候何れ兩三日中

参堂萬々可申上候

頓首

十月朔日向賀

尚々御序文いまた脱

稿不仕候間御勝手次第

清書差上候可申候

〔斎〕藤月岑様 華山

玉几下

## 二. 書状の内容の検討

この書状によりこれは月岑の『東都歳事記』（図2）の草稿を読んだ華山が改訂について自分の意見を述べているものであることが

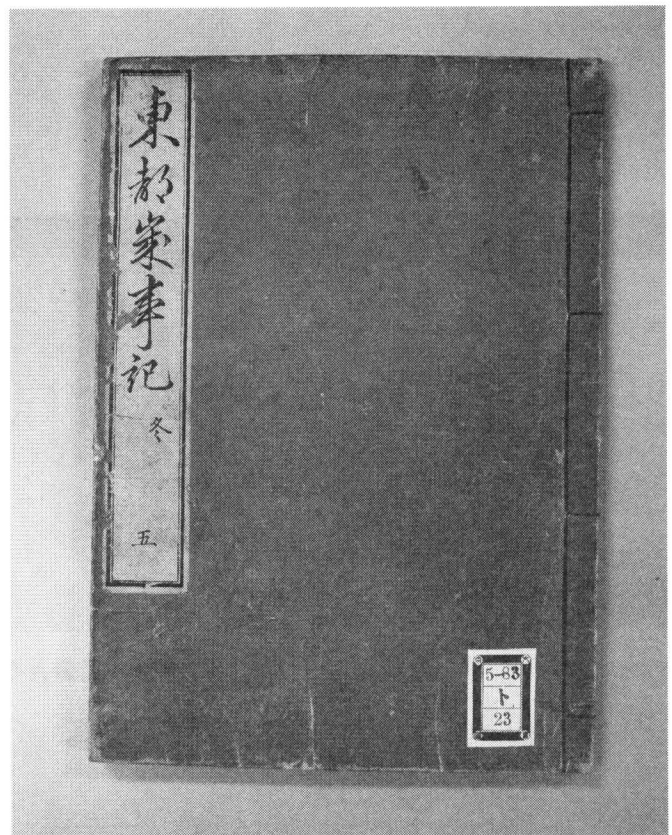


図2 斎藤月岑 『東都歳事記』冬部表紙 京都大学図書館蔵

判明した。月岑が何故その校訂を華山に依頼したかの検討は後に廻すとして、この校訂が歳事記のどの部分に該当するかを先ず調べる必要がある。そのキーワードとなるのは書状の記載内容から見えて差し当たり掃塵會・懸想文賣・餅搗の三点ということになる。これらは何れも年末つまり十二月の行事である。そこで『東都歳事記』冬の部の十二月の項を検討することとした。

### ア. 掃塵會

華山はこの書状で掃塵會の絵の上に『國朝詩別載』の詩を書き加

えるようにと勧めている。この掃塵會とは何か、この塵を掃うという言葉から思いつくのは「煤払い」の行事であろう。歳事記の本文を見ると、その十二月十三日の項にまさに次の記事が見つかった。

○煤拂貴賤多くは此日を用ゆ。大城の御煤拂の例は寛永十七年庚申十二月十三日に始りし由、前板の冊子に見へたり。家内に煤竹を入れ、す、餅を祝ふ、新宅に三年す、竹を入れざる事は『東鑑』に見ゆ。

○徘徊七部集の内『小文庫』煤掃之説

明ぼの、空より、物のほたくと聞ゆるは、疊をた、く音なるべし、けふは師走の十三日す、はきのことふきなり、げにや雲井の儀式九重の町の御法は嘉例ある事にして、只なみくくの人のす、はく躰こそいと面白けれ、おのく門さしこめて奥の一間を屏風に圍ひなし、火鉢に茶筌かけて帷子の上張爪さき見えたる、足袋もいとさむく、冬の日影の早く晝になりゆき、庭の隅調度とも取ちらしたる中に、持佛の後むきたるぞ目には立なれ、家の童の椽のやぶれすのこの下をのぞき廻るは、何を拾ふにやとあやし、味噌とよばる大男の袋かぶり箕きたるも珍らかに、米櫃のサンうちつけ、俎しらげ、行燈はりかへてたつくり鱈あさづけのかほり花やかに、かみしもの膳すゑならべたるに、ほどなく暮て高軒とはなりぬ。

す、はきやくれゆく宿のたかいびき  
はせを  
なぐれて雪のかゝるから竹  
山店

○享保の頃までは、古札納といふ非人、毎年十二月に武家町家を御はらひをさめ、古札納とさげび歩行けり、年中佛神の札守の溜りしを、錢を添て右の非人にあたへし也。この事『惣鹿子』『江戸砂子拾遺』等にもいへり。今はなし。

○（以下略）

そしてこの記事の後に二丁にわたって煤払いの情景を描いた長谷川雪且(図3)の挿絵が描かれている。その絵の上部には詞書が書かれ、右側の上には

商家煤拂

何方へ行て遊はむす、はらひ  
擧白

とあり、左側の上には

清沈歸愚國朝詩別載

掃塵行  
張自超

掃塵練日臘、三七 細竹長竿風、捲、疾  
歳々荒村守、敝廬、家々浄掃、迎、新吉  
掃、遍、瓦椽、及、四圍、甌中之塵凝、不、飛  
朝來坐曝、茅檐下、垢面相逢猶苦、飢

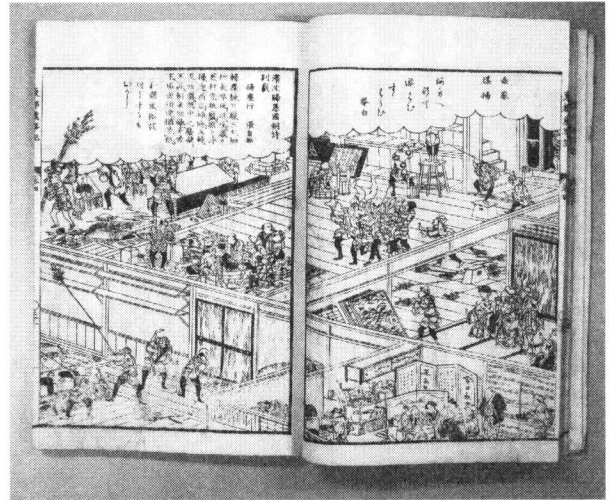


図 3a 斎藤月岑 『東都歳事記』 煤払い図 (全)



図 3b 斎藤月岑 『東都歳事記』 煤払い図 (部分)

和漢風俗を同うするもおかし

とある。この左側の漢詩こそが華山が書状で述べていた詩に他ならない。因にこの『國朝詩別載』とは清の沈德潜（沈歸愚）が編纂した三十二卷の大部の詩集で清初から乾隆時代までの詩人九百名、作品三千首を集めたもので一七六〇年に中国で刊行されている。日本ではそれは宝暦一〇年にあたるので華山がこの詩集を知っていたということはおそらく刊行後間もなく我が国に将来されたのである。煤払いの画中に此の詩を挿入することにより、此の行事が中国でも同じような形で存在するということが分かり、華山のアドヴァイスで一挙にグローバルな視野の広がりを示すという効果を挙げることになっている。

#### イ. 大道餅搗

次いで華山は書状で大道餅搗についての細注を是非入れるようにと提言している。本文の十二月廿六日の項を見ると次の記事が見つかった。

十二月廿六日

○此節より餅搗<sup>モチツキ</sup>街に賑し、其鉢尊卑によりて差別あれども、おほよそ市井の餅つきは餅搗者四五人宛組合て竈蒸籠臼杵薪何くれの物擔ひありき、備て餅つかする人糯米を出して渡せば、やがて其家の前にてむら立、街中せましと搗たつることいさましく、晝夜のわかちなし、俗是を賃餅又は引ずりなどいふなり、

都て下旬親戚に餅を送り歳暮を賀す、是を餅配りといふ。鹽魚乾魚を添るなり。

餅の手をはたいていづる衣配 木導

文笹の模様先見る衣配 曾良

有明も三十日にちかし餅の音 はせを

その後二丁にわたりやはり長谷川雪旦の挿絵(図4)が描かれている。その詞書は右側上は

### 歳暮交加圖

袖はへて年のさかひにたつ市の

行きかひいそく道ぞ賑ふ

光廣卿

そして左側上には

元日をおこすやうなり節季候

其角

とある。絵は年の暮れで慌ただしく人の行き交う街の情景で、門松を立てる者、歳暮の品を運ぶ者、節季候などが通行している中、左下隅の家の前の大道で一人の男が蒸籠で糯米を蒸し、その横で二人が勢い良く餅を搗いている。これが華山のいう大道餅搗であろうか。先の『東都歳事記』の記事によると、賃仕事として餅をつかせるのを俗に「賃餅又は引ずり」と称しているようである。ところでこの

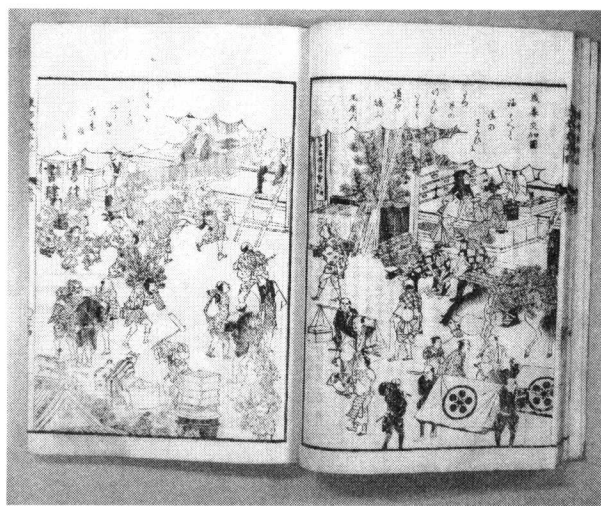


図4a 斎藤月岑 『東都歳事記』歳暮交加図(全)

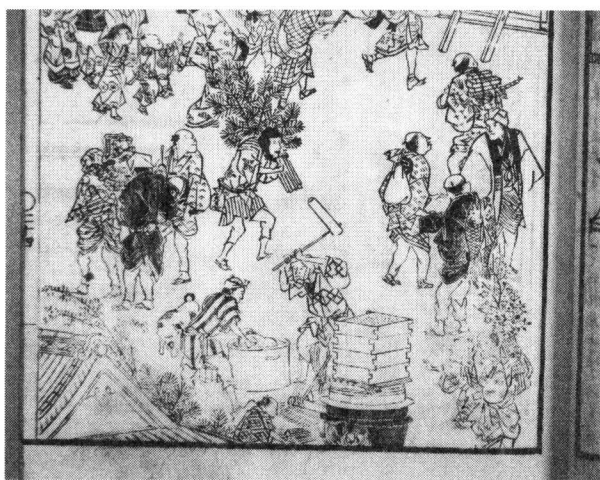


図4b 斎藤月岑 『東都歳事記』歳暮交加図(部分)

餅搗の様子はこの挿絵全体の中の片隅にさりげなく描かれており、うっかりすると見落とす虞れもある。そこで華山は月琴に対し、本文中に細注を加えることによりこの行事を読者に周知させるよう肌理細かな忠告をしたというのがこの書状の持つ意味に違いない。

しかしここで不思議なのは、書状の中で「餅搗のわけハ加へ申度事ハ」として、突然懸想文売りと『増山井』という事例が登場するところにある。

### ウ・懸想文売りと『増山井』

そこで次に懸想文売りと『増山井』について検討してみよう。この行事は『東都歳事記』の中には出て来ない。従って直接の関係はないように思われる。しかし華山が大道餅搗の関連で取り上げる以上、そこに何らかの意味があると考えざるを得ない。

そもそも懸想文売りというのは京都独特の行事で、現在は京都市左京区の聖護院の向かいに有る須賀神社の節分祭に行われている。そこでは烏帽子水干姿の神官が梅の木の枝に文をつけ覆面をして社頭において懸想文を授与する。そして「これを求めて人知れず鏡台や箆笥の引出しに入れておくと容姿端麗に着物が増え良縁があると、いので京の町々の娘子等に持て囃されて<sup>4)</sup>」いるもののようなのだが、実はここでの行事は昭和二十二年頃画家の吉川観方等によって再興されたものであるという。しかも当神社で伺ったところ、その復興以前の状況については同神社は全く関係がなくよく分からないということであった。そこで他に関連資料はないかと調査していたところ矢野貫一氏に「懸想文売り」という論文<sup>5)</sup>があるとの教示を得た。

それによると、これは本来祇園の犬神人（弦指<sup>ツルサシ</sup>又は弦召<sup>ツルメツ</sup>ともいう）がやっていた行事で、鎌倉時代頃から行われていたのが一時中絶していたが、江戸時代になって寛永年間（一六二〇年代）に復活し、寛文期（一六六〇年代）を経て貞享年間（一六八〇年代）頃まで続き、その後又廃れてしまっていたようである。それが百数十年を経た文化文政期（一八〇〇年代）になって俳諧に親しむ人達の間で再度復興の機運が盛り上がり、天保頃まで続いていたらしい（図5）<sup>6)</sup>。その再開の時期というのが丁度華山の画家としての活躍期でもあった。その場所は祇園に程近い建仁寺門前の松原弓矢町といわれているが確認していない。その後又長く廃絶していたことは、『東都歳事記』の十三年後に刊行された曲亭馬琴編／藍亭青藍補『増補俳諧歳時記葉草』嘉永四年（一八五二）の「懸想文売」の項にも「（前略）今は絶て其事なければ、恋の文のやうに覚えたる人も有故に、口伝をこゝにするしはべる。」とあることから判明する。それが現代の昭和に入つて吉川観方氏等有志により再興されたというのが事実であろう。

ところで俳諧歳時記の始まりといわれる北村季吟の『増山井』寛文三年（一六六三）には「けそう文売（俳）」という記載がある<sup>8)</sup>。つまり華山がこの書状で書いた趣旨は「懸想文売りが上方で文化末から文政初めにかけて復活再興され、今でも盛んに行われているのは季吟が寛文の頃にその著『増山井』に俳語として記しておいたことがきっかけで俳諧に親しむ人達の間で思い出されたことであり、これから考えてもこの大道餅搗の行事は雪旦の挿絵ではあまり目立たず、将来忘れられ廃れる虞れもあるので、本文の細注で詳しく説



図5 川端玉章 「懸想文売り図」(部分) 三井記念美術館蔵

明しておけば後にこれを復興しようとした時、それがどんな行事だったのか後世の人も知ることが出来るだろうから是非入れておくように」と勧めているというのが真意なのではないか。華山は月岑の草稿を読んで、もう少しこの書を歳時記として俳諧に目を向けさせる必要性を感じ、敢て『増山井』の例を持ち出したということも考えられる。

#### エ・大道餅搗再説―その光と影

そこでもう一度大道餅搗といわれる行事に戻って考察してみよう。季吟の『増山井』には「もちつき」も俳語として記載されている。しかし「賃餅」とか「引ずり」という当時江戸で使われていたであろう言葉は記載されていないので、この時代『東都歳事記』にあるような大道餅搗という賃仕事があったのかどうかは分からない。そこで何か別に絵画資料等があるのではないかと探索したところ、『増山井』から二〇年余り経た後の元禄期の江戸で活躍した画家英一蝶(一六五二―一七二四)の三宅島配流以前の作品『風俗画鑑』(茨城県立歴史館蔵)の中に「臼こかし画賛」(図6)という作品があるのを発見した。そこには

「 白

しらしらしらけたる夜の

曙に白犬の声ばかり走り

烏も身ぶるひにおのが

烏羽玉の

まだら成も興有と



自ほれせぬに

白こかし賤の男

憎し雪の跡

暁雲堂朝湖自畫讚（印章）

という贅を伴い、降りしきる雪闇の中、簑笠を着た男が一人、杵を肩に臼を転がして行く寂しげな姿が描かれているものであった。これがいわゆる「賃餅」又は「引ずり」とも云われる職業の男に違いない。しかし『東都歳事記』のそれとは打って変わって、表現に大きな格差を感じさせるものがある。この絵は一蝶の配流以前の作であることから元禄十一年（一六九八）以前の作ということになり『東都歳事記』に出て来る文政期（一八〇〇年代）より約一〇〇年は溯る時期の作品である。ところで描かれた絵の内容を両者比較すると『東都歳事記』の方が、歳暮の街の賑いの中、三人の逞しい男達が勇ましく餅を搗く、云わば「表」⇨「光」の姿であるとすれば、一方一蝶の作品は餅を搗いた後、家路に急ぐのか、或いは更に顧客を求めて当てもなくさまよい歩くのか、その男の心の内をも偲ぼせる哀愁のある「裏」⇨「影」の側面を描いて人を惹付ける。贅にも「賤の男」と、彼がおそらく被差別部落の民であることを暗示していることから、当初はいわゆる「引ずり」の職業は夜を徹して行っていたという伝承の有ることをこの絵は証明してもいるようだ。それが『東都歳事記』に描かれた文政頃の活気溢れる江戸となると、一転大道餅搗として、人々の行き交う白昼の街路を彩る賑やかな歳末風景となったのかも知れない。何れにせよこの二つの絵を見比べる時、この行事の持つ光と影の二つの側面が透けて見え、意外に奥深



図6 英一蝶 「白こかし画賛」（『英一蝶展図録』板橋区立美術館より転載）

いものであることに興味を覚える。

この大道餅搗への細注の追加という華山の助言が月岑に本文の追加修正を促し、それが無ければ見過ごされていたであろうこの行事の二面的且つ複雑な性格が明らかになり、我々現代の読者に対しても幅広い知識を与えるものになったのも事実であろう。

### 三・書状を巡る問題

以上の考察で書状の内容は略解明出来たと思われるが、なお検討を要する事項が幾つかある。

#### ア・書状の書かれた時期と月岑の草稿『三度目清書』本の存在

東洋文庫本の朝倉治彦氏の解説の中に、天理大学附属天理図書館に月岑の『三度目清書』という草稿があることが記載されているのを知った（以下これを草稿本という）。これについては同解説にも詳しい説明はなく、又これを紹介した文献も他に見当たらない。ここには何らかの有力な情報が含まれているのではないかと考え、同館に申請し複写を入手し精査したところ、それは狙い通り極めて重要な情報を私にもたらしてくれた。

この草稿本は文政十二年（一八二九）正月の年記を持ち、その奥書から、翌十三年には刊行する予定であったことが分かった。草稿本の内容は殆ど刊本に近い状態になっているが幾つかの点で次のように刊本と相違又は欠落のある箇所が見られた。

①序文が空欄になっている。これは華山の書状の末尾に「尚々

御序文いまた脱稿不仕候間」とあるのにも対応している。刊本によると池田冠山<sup>10</sup>の序文と月岑の提要の日付は天保三年（一八三二）でありこの草稿が書かれた三年後のことである。

②華山の書状で指摘している箇所が草稿本と刊本とでは大きく異なっている。

「煤払い」の項では刊本では前に引用したように俳諧七部集の項が細かく記されているが、この草稿本では全く抜けている。又「餅搗」の項では刊本は細部まで大道餅搗のやり方を説明しているが草稿本には全く見あたらない。

③長谷川雪旦の挿絵はこれには付されていないので確認出来ないがこの時期には出来ているはずで、おそらく当初は添付されていたのが後に何らかの理由で失われたと思われる。朝倉氏の同じ解説によれば、長谷川雪旦に『筆耕謝礼控』（国立国会図書館蔵）というメモが残っており、雪旦は月岑から文政十年（一八二七）に『東都歳事記』の挿絵の下書代を受領しているようなのでそのことが裏付けられる。

以上により華山が月岑から見せられ意見を求められたのはこの草稿本か或いはこれに極めて近いものであったことは先ず間違いない。従ってこの書状が書かれた時期は文政十二年（一八二九）を上限とし、序文の出来上がった天保三年（一八三二）を下限とする四年の間、中でも一八二九年に近い頃と推定出来る。そして月岑は華山の意見を大きく採用してそれを実際の刊本で修正したのである。なおこの草稿本には他にも多くの興味深い情報が含まれている。例えば刊本では挿絵の上に俳句、和歌、漢詩等を記載している

のはもちろん、本文でも行事や景物の記事の後に芭蕉、其角、嵐雪等有名な俳人の例句等を数多く載せ歳時記としての体裁を良く整えている。しかし草稿本には本文中にこれらの例句の記載はほとんど見られない。月岑は華山の『増山井』を例にとつての忠告を受け、歳時記としての性格をより鮮明にする必要からそうした点の補訂に努め、そのため刊行予定を当初の文政十三年から天保九年まで大幅に延長したとも考えられる。もちろんそれだけではなく、その間に祖父から引き継いだ『江戸名所図絵』の刊行を先にすべく急いだこともあつたろうが、こうした補訂作業にかなりの期間を要した事は疑いない。月岑が華山に何度も意見を求めたであろうことは書状に「毎々感嘆仕候」とあることから容易に想像される。又挨拶に華山の好物の酒を持参しているようなので手紙だけでなく直接面会しているのも間違いなからう。更に「何れ兩三日中参堂萬々可申上候」と華山の方からも訪問を約している。

ところでこの期間月岑が京都へ行ったのか華山が江戸へ下向したのか現存の記録にはない。華山の江戸行きがはっきりしているのは文政二年（一八一九）「紅花屏風」の取材に行った時であり、これは静岡県立美術館蔵の「富士清見瀉之図」の詞書に「文政己卯赴東武途中偶看清見瀉之月出不堪賞情聊写小景」と書かれてあることで分かる。ただこの年、月岑はまだ十五歳でありこの時のこととは考えられない。一方月岑はかなり詳細な日記を残しているが、それも残っているのは文政十三年（一八三〇）以降で、その上天保三年と五年分は欠落しており残存するものの中には華山と出会ったという記録はない。華山も文政から天保にかけては画業の最盛期で、彼の

代表作の大部分はこの時期のもので此の期間江戸に下向している暇はなさそうである。今のところ『東都歳事記』の完成を急ぐ月岑が情報収集のため上方へ行ったのではないかと推定しておきたい。「京師にては云々」という記事がこの書の本文中にしばしば見られ『東都歳事記』を完成させるためには京都の行事をしっかりと把握しておくことが不可欠であると考えたのは当然のことであつたろう。

#### イ. 校訂を依頼した相手が何故華山であつたのか

月岑の代表作の一つに『武江年表』<sup>(1)</sup>がある。これは江戸に起こつた事柄を年度別に詳細にわたって記載した年表で嘉永二年（一八四九）に前編が刊行されているが、その文政七年（一八二四）の項に次の記事がある。

○三月二十一日、画人歙形蕙齋卒す（名紹真、北尾重政が門人にして、始めは北尾政美といへり。一枚絵草紙のるゐ多く画けり。略画式をあらはして世に行はれ、又京の黄華山が「花洛一覽図」<sup>(2)</sup>にならひて、江戸一覽の図を工夫し梓に上せ、神田の社へも江戸図の類をささげたり。（以下略）

「華洛一覽図」（図7）は華山が文化五年（一八〇八）に刊行した木版一枚摺の、空中の一点に視点を置き京都の町全体を一望した作品で、いわゆる鳥瞰図の創始と云われている。<sup>(2)</sup>画中には当時焼失して存在しない方広寺の大仏殿を描き、京都人にノスタルジーを呼び起こす等、都人の人気を博し洛陽の紙価を高からしめたものである。

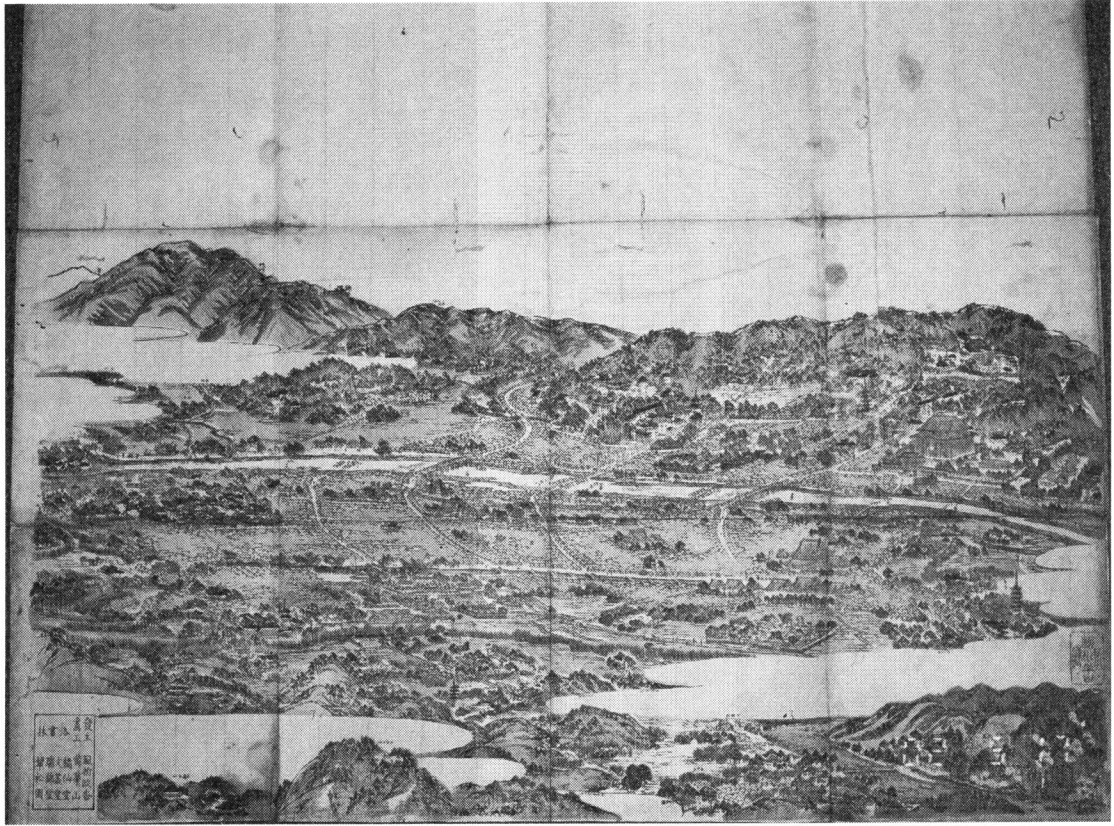


図7 横山華山 木版摺「華洛一覽図」個人蔵

鳥瞰図はその後江戸においても鋏形蕙齋・葛飾北斎を始めとして大いに流行し、『江戸名所図絵』『東都歳事記』の長谷川雪旦の挿絵にも鳥瞰図を取り入れた作風の絵が多い。これを創始したのが華山であったという認識が月岑等当時の江戸の人達にはあった訳で、このことから見ても当時華山は現代で考えられているよりも上方のみならず江戸においてもよく知られた画人であったということにならないだろうか。

華山は岸派の分派横山派の総帥にして北宗画（漢画）の大家であったことは華山没後十年に刊行された『皇都書畫人名録』弘化四年（一八四七）に「北宗 華山先生門人」として嗣子の横山華溪を始め小澤華嶽・中島華陽等十数名の名をあげていることから明らかであり、「寒山拾得図」（ポストン美術館蔵）「西王母図」（図8）その他数多くの北宗画の代表的な作品を残し、その上風俗画家としての一面も兼ね備え、特に祭礼図は得意で「祇園祭礼図巻」「やすらい祭図屏風」（図9）「賀茂競馬図屏風」「葵祭図屏風」「大秦牛祭図」等の祭礼図、「四条河原納涼図」「糺川納涼図」「勸進相撲図」「大原女図」等の風俗画を数多く描いている。更に俳諧摺物も若い頃から手掛け（図10）、この道にも通暁していたことが分かっている。そうしたいわばマルチな教養を持った華山は『東都歳事記』の校訂者としては最も適任であったろう。

ウ. 『江戸名所図絵』から『東都歳事記』へ

京都の名所案内としては黒川道祐の『雍州府志』貞享三年（一六八六）が最も古典的なものであるがこれには挿絵はない。そ



図10 横山華山 俳諧摺物「土用干し図」柿衛文庫蔵



図8 横山華山 「西王母図」個人蔵



図9 横山華山 「やすらい祭図屏風」個人蔵

の後秋里籬島により出版され一世を風靡したのが『都名所図絵』安永九年（一七八〇）、『都林泉名勝図絵』寛政十一年（一七九九）であった。それに対抗して江戸の名所を世に普及させるべく月岑の祖父が企画し、二代目に当たる父幸孝が受継いだ。彼は文政元年（一八一八）四十七歳で早世したため三代目の月岑がこれを引継ぎ、最終的に『江戸名所図絵』前半十冊が天保五年（一八三四）、後半十冊が天保七年（一八三六）に刊行された。月岑はそれに引続き江戸の年中行事をまとめた歳時記風の図絵を刊行しようと、それまでに取掛かっていた草稿にその後の情報を加え、集大成したものとして天保九年（一八三八）懸案の『東都歳事記』を完成させた。それは丁度華山没後一年目のことでもあった。江戸の年中行事を集めたものとしては、それまでに『江戸惣鹿子』元禄二年（一六八九）に始まり『續江戸砂子拾遺』享保二十年（一七三五）『増補江戸年中行事』享和三年（一八〇三）その他多数あるが、「いまだ全備のものなしと聞く」のでこの書を編集したと『東都歳事記』の附言で月岑は述べている。そこに編集者としての月岑の自負があり、そのためにも一層の完璧を期する意味からも京の華山等有識者に校訂を依頼したのであろう。華山は校訂するに当たって俳諧歳時記としての性格をより補強する必要性を感じ、書状でもことさらに『増山井』に触れたと思われる。校訂の有り方についても二十歳余り年下の月岑に対し、「書を校するハ落葉をはらふか如し」と教訓めいた言葉を書状に記しており、更に「一字二字つゝの假名ちかひハはり付直にしたゝめ 云々」と細かいところまで目を配って校訂しているところも興味深い。もちろん月岑が校訂を依頼した相手はおそらく華

山だけではなかったであろう。しかし華山には何度も意見を求めていることは残っているこの書状だけから見ても明らかであり華山の見解を尊重していることは疑いない。月岑のこうした細部にわたっての検討努力により本書が江戸の風俗・年中行事と俳諧歳時記を見事に統合した従来の類書に勝るユニークな著作となったことがよく分かる。さらにこの書の特徴は『江戸名所図絵』と同じく長谷川雪旦という優れた絵師に挿絵を描かせていることで、この雪旦（後に一部子息の雪堤が補う）と月岑のコラボレーションがあつてこそ後世に残る名著となったといっても過言ではない。

#### 四・機能する情報ネットワーク（むすびに代えて）

京都の町絵師横山華山と江戸の町名主斎藤月岑の不思議な関係は以上でようやく明らかになってきた。絵画の教養は狩野派や土佐派等御用絵師といわれる専門画工のもので、町絵師風情にはそんな知識はないという美術史家は現在でも存在することを私は知っている。そうした言説は当時の絵師達の真の姿を知らない人のいうことだと私は思う。円山四条派・岸派或いは蕭白・若冲更には江漢だつて町絵師の範疇に入る。彼らに教養はないのだろうか。今回取り上げたこの書状一通を見ても、祭礼・年中行事等の風俗はもとより俳諧から、江戸時代と略同時期に当たる中国清朝の詩人の詩集にまで通曉し、広範囲な知識を駆使して校訂に当たる華山を一介の町絵師風情と言いつ捨てることは到底出来そうにない。むしろ当時の所謂町絵師の方が、無定見に粉本の模写に明け暮れる凡百の御用絵

師達よりは遙かに深い知識と教養を兼ね備えて自らの画業に当たっていたと言えるのではないか。それはむしろ絵師それぞれの資質の問題で、御用絵師だから或いは町絵師だからということだけで一律に決めつけるような問題ではない。そしてそこにこそ当時の京都の文化の奥深さがあると私は思う。斎藤月岑はそれを知っているが故に故実・風俗から内外の文学までの知識全般に通じた華山に自分の畢生の事業の一つである『東都歳事記』の校訂を託したのであろうし、その目的は充分に達成されたと思われる。そうした豊富な知識を持った京都の絵師横山華山と、江戸随一の文化人との名の高い大田南畝（一七四九—一八二三）の後を継承したとも言える希代のエンサイクロペディストにして「知の編集者」たる斎藤月岑との、東西二人の知識人の濃密な交流を示すその一端が、この一通の書状から読み取れるとするならば、江戸時代における上方と江戸を結ぶ情報ネットワークの豊かな広がりによって興味深いものを覚えるとともに、この書状の持つ重要な意義を改めて感じざるを得ない。

### 註

- (1) 横山昭「もう一人の華山(上)(下)」『日本美術工芸』五二五・五二六号 1982  
『横山華山展図録』山形美術館 2000
- (2) 『東都歳事記』全五冊(原本) 斎藤月岑著 京都大学蔵  
『東都歳事記』全三巻 斎藤月岑著 東洋文庫 平凡社 1972  
朝倉治彦校注  
『江戸名所図絵』全六巻 斎藤月岑著 角川文庫 角川書店 1968  
鈴木棠三・朝倉治彦校注
- (3) 長谷川雪旦 安永八年(一七七八)―天保十四年(一八四三)

狩野派に学び、肥前唐津藩の御用絵師を勤める。又挿絵をよくし、斎藤月岑の『江戸名所図絵』『東都歳事記』の挿絵を描く。晚年法橋に任ぜられる。

- (4) 『須賀神社由緒略記』
- (5) 矢野貫一「懸想文売り」『環日本研究』三 環日本研究会・京都外国語大学 1996
- (6) 画家川端玉章は明治の人、この絵は廃絶したこの行事を偲んで描いたのであろう。
- (7) 『増補俳諧歳時記葉草』曲亭馬琴編／藍亭青藍補 岩波文庫 岩波書店 2000  
堀切 実校注
- (8) 『増山井』北村季吟著『古典俳文学大系』2「貞門俳諧集」1 集英社 1971
- (9) 『三度目清書本』斎藤月岑著 天理大学附属天理図書館蔵  
『三度目』というからには『一度目』『二度目』の清書本もあったのであろうが現在その存在は知られていない。
- (10) 池田冠山 明和四年(一七六七)―天保四年(一八三三)  
池田定常、因幡若桜藩主、学者大名として知られる。幕府の地誌編集に協力。
- (11) 『江戸名所図絵』にも序文を与えており月岑とは親しい間柄であった。  
『江戶名所図絵』全二巻 斎藤月岑著 東洋文庫 平凡社 1968  
金子光晴校訂
- (12) 最近の研究では華山が鳥瞰図を創始したとは必ずしも言えないとの説もある。併し斎藤月岑等当時の江戸人士の間ではそのような信じられていたのも事実である。
- (13) 『蜀山人 大田南畝展図録』太田記念浮世絵美術館 2008  
『浮世繪類考』は大田南畝が寛政年間(一七九〇年代)に刊行したと云われている。その後改訂が繰り返されたが斎藤月岑は弘化元年(一八四四)『増補浮世繪類考』を著している。
- (14) 『知の編集工学』松岡正剛著 朝日新聞社 1996

〔付記〕

本稿は二〇〇九年七月の日本近世絵画研究会において発表した内容を加筆修正してまとめたものである。この度百橋教授のお勧めにより本論集に掲載させて頂くことになった。なお書状の解読については江戸東京博物館都市歴史研究室長小澤弘教授の懇切な指導を受けた。又関連資料の調査については八反裕太郎氏（穎川美術館）の労を惜しまぬ協力を得た。各位に厚くお礼申し上げます。

横山昭（よこやま・あきら）

一九二九年 神戸市生れ

一九五三年 神戸経済大学（旧制）卒業

日本近世絵画研究会会員

（専門）日本美術史



横山華山・斎藤月岑関連年表

年代	横山華山と京都	斎藤月岑と江戸
1775	安永 4 曾我蕭白上京に住む	
76	5 池大雅没 (54 才)	
77	6	
78	7	葛飾北斎勝川春章に入門春朗と号す、 <u>長谷川雪旦</u> <u>出生</u>
79	8	
80	9 岸駒京に上る、秋島籬島『都名所図絵』刊行	
81	天明 1 <u>華山出生説あり(『黄華山一派画家略伝』による)、</u> 曾我蕭白没 (52 才)	
82	2	
83	3 与謝蕪村没 (68 才)	
84	4 <u>横山華山出生(『扶桑画人伝』による通説)</u>	
85	5	
86	6	
87	7	
88	8	
89	寛政 1	
90	2	大田南畝『浮世繪類考』刊行 (この頃)
91	3	
92	4 [牛若丸図]	勝川春章没 (67 才)
93	5 円山応挙没 (63 才)	
94	6	
95	7	
96	8	
97	9 [正月飾り図] (俳諧摺物)、駒井源埼没 (51 才)	歌川広重出生
98	10	『江戸名所図絵』刊行許可出る
99	11 秋島籬島『都林泉名勝図絵』刊行、長澤蘆雪没(46才)	<u>松濤軒長秋(斎藤月岑祖父)没(63才)</u>
1800	12 [六代横山喜兵衛像] (この頃)、伊藤若冲没(85才)	
01	享和 1 [関羽騎馬図]、 <u>六代横山喜兵衛没(89才)</u>	
02	2 木村兼葭堂没 (67 才)	
03	3	『増補江戸年中行事』・曲亭馬琴『俳諧歳時記』刊 行
04	文化 1 <u>横山華山(21又は24才)</u>	<u>斎藤月岑出生</u>
05	2	
06	3 [四季漫画風俗図巻] (ボストン美術館蔵)	喜多川歌麿没 (54 才)
07	4 [しぐれの忌] (俳書木版挿絵)、皆川淇園没(74才)	
08	5 [華洛一覽図] (木版) 刊行	
09	6	
10	7	
11	8 [椿図] (智源寺天井画)・[二見之図]、松村呉春 没 (60 才)	
12	9	
13	10 <u>華山笹屋町に住む(『平安人物志』文化10年版)、</u> [大黒天図]	

年代	横山華山と京都	斎藤月岑と江戸
14	11	歌川豊春没 (80 才)
15	12	鳥居清長没 (64 才)
16	13	山東京伝没 (56 才)
17	14	
18	文政 1	<u>斎藤幸孝 (月岑父) 没 (47 才)</u>
19	2	
20	3	北尾重政没 (82 才)
21	4	
22	5	
23	6	大田南畝没 (75 才)
24	7	<u>歙形蕙斎没 (64 才) 『武江年表』 に華山との関連記事あり</u>
25	8	亀田鵬斎没 (75 才)、歌川豊国没 (57 才)
26	9	
27	10	<u>長谷川雪旦 『東都歳事記』 下書代受領 (『雪旦筆耕謝礼控』 による)</u>
28	11	酒井抱一没 (68 才)
29	12	<u>『東都歳事記』 3 度目清書 (天理大図書館)</u>
30	天保 1	
31	2	
32	3	<u>『東都歳事記』 池田冠山序文、月岑提要執筆</u>
33	4	溪斎英泉 『無名翁随筆』 (『浮世繪類考』 増補版) 刊行
34	5	<u>『江戸名所図絵』 前半 10 冊刊行</u>
35	6	
36	7	<u>『歳事記』 日尾荊山序文、『名所図絵』 後半 10 冊刊行</u>
37	8	
38	9	<u>斎藤月岑 『東都歳事記』 刊行</u>
39	10	
40	11	谷文晁没 (78 才)
41	12	渡辺華山没 (49 才)
42	13	
43	14	<u>長谷川雪旦没 (66 才)</u>
44	弘化 1	<u>斎藤月岑 『増補浮世繪類考』 刊行</u>
45	2	
46	3	
47	4	<u>斎藤月岑 『声曲類纂』 刊行</u>
48	嘉永 1	曲亭馬琴没 (82 才)、溪斎英泉没 (59 才)

年代		横山華山と京都	斎藤月岑と江戸
49	2		葛飾北斎没（90才）、 <u>斎藤月岑『武江年表』前編刊行</u>
50	3		
51	4		曲亭馬琴／藍亭青藍補『増補 俳諧歳時記栞草』刊行
52	5	<u>華溪室町一条南に住む（『平安人物志』嘉永5年版）</u>	
53	6	中林竹洞没（78才）	
54	安政 1		
55	2		
56	3	山本梅逸没（74才）	
57	4		
58	5		鈴木其一没（63才）、歌川広重没（62才）
59	6	岸連山没（56才）、浮田一恵没（65才）	
60	万延 1		
61	文久 1	<u>3月、華山 25回忌追善遺墨展円山にて開催</u>	歌川国芳没（65才）
62	2		
63	3	貫名海屋没（86才）	
64	元治 1	<u>横山華溪没（49才）</u>	歌川国貞没（79才）
65	慶応 1	岸岱没（80才）	
66	2		
67	3		
68	明治 1		龍田舎秋錦『新增補浮世繪類考』刊行
∫	∫	(中略)	
∫	∫		
78	11		<u>『武江年表』後編脱稿、<span style="border: 1px solid black;">斎藤月岑没（75才）</span></u>
79	12		

- 注) 1. 華山の年記の在る作品を参考迄に [ ] で記載した  
2. 華山・月岑の関係記事は二重線を施した  
3. 華山・月岑の生没年、『東都歳事記』刊行年は□で囲った

以上